

## 第81回 全国図書館大会に参加して

是 枝 敬 一  
伊 藤 覚 子

1995年度の第81回全国図書館大会は新潟市の新潟県民会館大ホールを中心とする合計15の会場で、10月25日（水）から27日（金）の3日間開催された。

私たちは、第3分科会である「大学図書館」の分科会に参加したのであるが、この度の中京大学図書館学紀要への寄稿にあたり、それぞれ異なった角度からこの大会を振り返ってみた。

### 全国図書館大会雑感

《佐渡へ》

♪ ハアー さどへー さどへと くさきもなびくよ

♪ ハアヨイサー

運転手が唄い、バスガイドが合いの手をいれる。私はいま佐渡島の中央部に位置する国仲平野をのんびりと走る観光バスに揺られている。名だたる観光地とはいえ、これほどのパフォーマンスが必要なのか？…と思いつつ、いつしか佐渡へ来ているのだなという実感が湧きあがっていることに気がつく。最後部の座席に着いている私の左隣にはわが図書館事務長の福井司郎氏が、そしてその左には濱田敏郎（現・常盤大学人間科学部）、今まど子（現・中央大学文学部）両先生方の顔もある。今、この人たちの思いも私と同じなのだろうか。一泊のこの観光ツアーには、明日、金井（かない）町立図書館の見学も組み込まれている。この図書館こそ一昨日

(平成7年10月25日) 全国図書館大会で優秀図書館として唯一表彰された町立図書館である。

### 《認識も新たに》

第81回全国図書館大会は『日本海からのメッセージ』—生涯学習社会と情報化時代の図書館サービスをもとめて—のテーマのもとに新潟市で開催された。新潟での大会は大正7年の実施以来77年を経て平成7年の今回が2度目の開催だそうである。図書館員として2年目で図書館の業務や図書館学について浅学・無知蒙昧の私をこのような大会に参加させて頂いた関係各位に深く感謝したい。参加者総数2,200名を越すこの大会では14もの分科会が設けられた。私は「大学図書館」の第3分科会に出席したのであるが、先ほど述べたような私自身の立場からして、分科会のテーマである『電子図書館化への変貌』から外れて、図書館の本質そのものを教えられ、かつ考えさせられた大会への参加であったように思われる。それは大会の最終日、閉会式に先だち行なわれた全体会での分科会報告を聞いてのことである。14の分科会すべてに3分間の時間が与えられ、代表者からの報告がなされた。(たいていの報告者がオーバータイムであったが)。

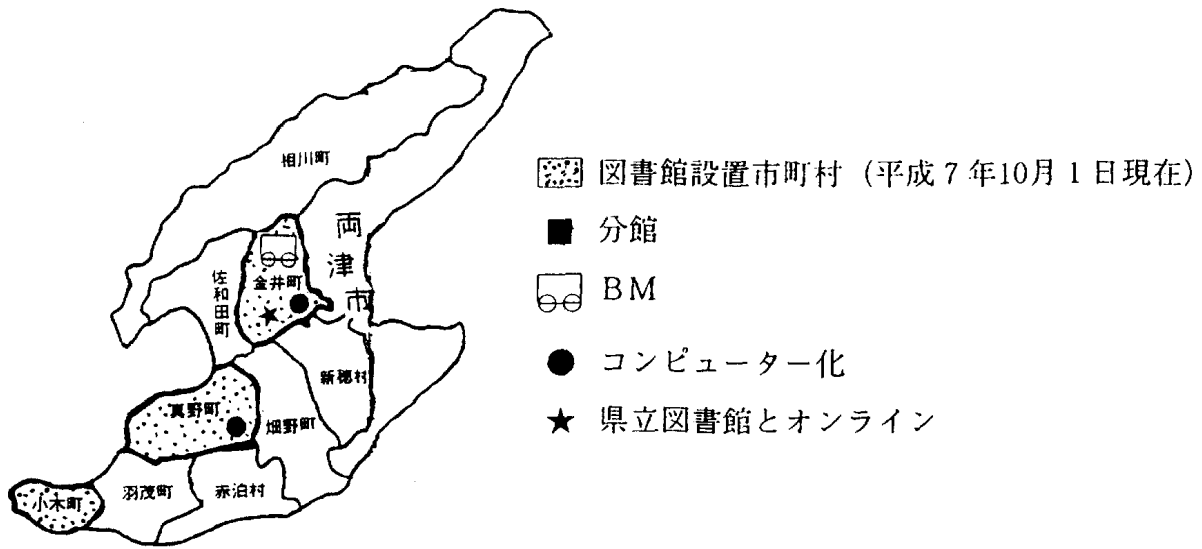
さらに、次回IFLA(国際図書館協会連盟)北京大会の主催国として中国の代表から、通訳をとおして、参加の呼び掛けと歓迎の挨拶も行なわれた。日本全国図書館大会もいっきに国際的な様相を帯びてきた。

ひとくちに『図書館』というが、これほどまでに間口が広く、かつそれぞれがいかに奥深いものを孕んでいるかをいやというほど認識させられたのである。したがってこの報告書もそのあたりを中心に、市町村立図書館の正常な運営が公共図書館活動の土台であるという根本的な考え方などを考察しながら私の感想を述べてみたい。依頼されたとはいえ、このような拙文が中京大学図書館学紀要に掲載されることは恥ずかしい極みであるが、あるべき図書館員としての姿に少しでも近づけるよう、今後多くのご助言

ご指導を戴くために敢えて筆を取るものである。

### 《表彰された公共図書館》

新潟県佐渡郡金井町。人口7,366名、世帯数2,492戸（平成7年



10月1日現在)の農業(世帯数のほぼ3割が農業に従事)の町である。佐渡には、10の市町村があるが、この町だけが海に面していない。この町立図書館が優秀図書館として表彰された背景、現状や歴史的経緯を考察してみたい。

まずは今回の図書館大会の要綱に掲げられた表彰理由の全文である。

『金井町は人口7,400人の町で、佐渡のほぼ中央に位置し、世阿弥配所の地として能謡が盛んであり、日本でも有数の能舞台がある。

図書館は大正13年に発足し、昭和28年4月1日に公立図書館となった。平成4年4月の新館開館を機に金井町は「生涯学習の町」宣言を行なっている。

図書館の電算化、県立図書館とのオンライン化、レファレンスサービス、リクエスト制度、子ども読書会等幅広い図書館サービスを行なっており、

人口1人当たりの貸出冊数は、平成4年度3.8冊、5年度3.3冊、6年度3.7冊と、利用者数も含め県内上位の実績を誇っている。

水準の高い図書館サービスは、島内はもちろんのこと、県内の町村立図書館整備促進に大きな影響を与えている。』

公共図書館が正常な運営と発展を遂げていくためには、さまざまな条件を満足させる必要がある。自治体が卓越した行政能力を持つことはもちろんであるが、魅力的に提供される“資料”と、奉仕の精神をもつ優秀な“図書館員”それと民主主義のもと、生涯において教育・文化を高揚し創造的な思考力をもつ人間になろうとする意欲をもった“利用者”が存在することである。まさにこの図書館はそのような条件を満たしていると言えよう。

提供された資料「新潟県立図書館作成の新潟県図書館白書1995」を参考に、もう少し詳しくみてみよう。新潟県の市町村立図書館の設置率は26.8%（平成7年10月）である。全国のそれは40.6%（平成6年度）で、新潟県はかなり低い値を示している。しかし1980年を100とした場合の図書館設置率は1994年度の全国平均が152に対して、新潟県のそれは165となっており、県内の市町村において図書館設置の気運が高まりつつあることを示している。そのような新潟県の図書館事情のもとで、金井町立図書館の実情をさらに具体的にみてみよう。表1をみると一目瞭然であるが、それぞれの項目について少しずつコメントを付け加えてみたい。

**【蔵書冊数】** 人口100人当たりの冊数である。

861冊と県内では群を抜く数字であり、全国の168冊に比較しても驚異的な蔵書数である。今年の4月1日現在の蔵書冊数が63,638冊であるが、収容冊数は80,000冊位だそうである。郷土資料コーナーには思った以上に多くの資料が排架されており、郷土の文化を大切に保存しようとする地元の人々の心が伝わってくるようであった。金井町に続く真野町、小木町も佐渡島の自治体であるが、県内の蔵書冊数のベスト3を

表1 新潟県の図書館総合サービスカー一覧

	金井町 861					
	真野町 585					
	小木町 478					
	出雲崎町 411					
	広神村 393					
	聖籠町 359					
	川口町 317	金井町 681				
	加茂市 288	長岡市 355				
	吉田町 282	聖籠町 316				
	三条市 261	真野町 308	金井町 887			
	糸魚川市 240	小木町 302	聖籠町 611			
	新津市 219	朝日村 266	加茂市 523			
	見附市 198	川口町 209	吉田町 469			
	長岡市 194	見附市 203	広神村 457			
	上越市 185	上越市 200	朝日村 423			
	小千谷市 180	出雲崎町 198	出雲崎町 350			
	燕市 180	吉田町 183	見附市 333			
	柏崎市 176	頸城村 166	長岡市 322			
	五泉市 176	広神村 149	頸城村 304	長岡市 133	広神村 4.2	
項目	蔵書冊数	受入冊数	資料費	購入冊数	貸出冊数	職員数
基準指標	全国平均	全国平均	全国平均	基準目標達成	基準(報告)	基準目標達成
	168冊	145冊	272円	100%	4冊	100%
	黒埼町 160	加茂市 144	真野町 271	聖籠町 94	金井町 3.7	五泉市 58
	白根市 154	小出町 111	糸魚川市 268	上越市 94	長岡市 3.5	柏崎市 50
	頸城村 148	五泉市 108	新津市 224	朝日村 80	見附市 3.3	糸魚川市 46
	新発田市 147	黒埼町 106	三条市 220	金井町 74	小出町 2.8	加茂市 44
	水原町 128	三条市 95	小木町 218	吉田町 60	三条市 2.6	三条市 44
	小出町 127	糸魚川市 93	五泉市 196	見附市 55	上越市 2.5	金井町 40
	六日町 126	新潟市 91	新潟市 188	新潟市 55	聖籠町 2.4	聖籠町 40
	新潟市 126	小千谷市 183	加茂市 50	吉田町 2.4	長岡市 3.6	長岡市 36
			182	広神村 4.2		35

- 全国平均は、「日本の図書館1994」による。
- 県内の数値は、平成6年度の数値。蔵書数は平成7年3月31日現在。職員数は平成7年4月1日現在。
- 能生町図書館は平成7年4月開館につき、数値は職員数を除き公民館図書室時代の数値。
- 購入冊数は、『望ましい基準(報告)』を元に算出した数値の達成率。
- 職員数は、『望ましい基準(案)』を元に算出した数値の達成率。

占めるこの現実、あとでふれる佐渡の文化の高さを具現するものであろうか。

【受入冊数】 人口1,000人当たりの受入冊数である。

利用者をひきつける魅力ある書架であるためには、新しい資料がまた必要である。冊数は次の項目である資料費と深く関わり、そして図書館の質を問われる重要な要素を秘めている。「良い蔵書とは、人々の知的好奇心を刺激し、どれもこれも読みたくならせるような本の集まりである。そういう本が並んだ棚は生きいきしている。そこでは、図書館の最も重要な働きの一つである人と本との出会いがおこり、人が本を発見する。」と、言われるからである。金井町が資料費もあわせて、受入冊数でも他の市町村をまったく寄せ付けないほどの高いレベルにあることに、私は町民、行政機関そして自治体の長にたいして畏敬の念さえ抱くのである。

【資料費】 人口1人当たりの資料費である。

前川恒雄氏は図書館の資料費には臨界点があり、臨界点以下では図書館の利用がなくなり税金の無駄遣いとなる。臨界点を越えると利用が飛躍的に伸び資料費がかえって足りなくなるが、図書館の活気が生まれそれがまた市民に支持され資料費をあげる要因になる。その臨界点とは人口の8分の1にあたる図書（資料）冊数を1年間に購入できる金額でありこれは公共図書館の資料費の最低基準とすべきであるという。

この説を金井町の場合にあてはめて計算してみよう。前に紹介した人口(7,366人)を8で割ると約920冊となる。ところが実際は1,000人当たりの受入冊数は681であるから1人当たり0.681となり、これに人口を掛けると5,000冊強となる。920冊に較べると格段の差である。ただし、金井町の受入冊数にはおそらく寄贈本等も含まれていると思われるので前川氏の説にあてはめることはまちがいであると思われるがひとつの指針にはなるだろう。

さらに1冊の平均単価を3,000円（この値段こそその図書館の目的とする動向と選書センスに関わってくるが）として920冊を掛けてみる

と年間総資料費は276万円が計上されればよい。ところが現実の金井町の1人当たりの資料費887円を基に算出すれば653万円強となる。もちろんここでも本の平均単価を3,000円と仮定したものであるから金額はあくまで比較の数字でしかないが、これもまた8分の1説を大いに上回っているのは言うまでもない。

しかし、一般的には国民としてやはり全国的な平均値が気になるところである。資料費の全国平均は272円であるから金井町の30%にすぎない。残念ながら日本の図書館の1人当たりの資料費は前川氏の理想とする数値にはるかに及ばない。全国の市町村立図書館の設置率さえ5割に満たない現状からすると当然のなりゆきかもしれないが、日本の図書館の発達がせめて現在のアメリカやイギリスの実態にまで到達できる時代が到来するのであろうか。

**【購入冊数】**表1の註釈にある『望ましい基準（報告）』とは、平成4年にそれぞれの図書館から提出された数値で、開架冊数の5分の1が提唱されている。金井町の達成率が74%と低い印象を受けるがこれは当時の開架冊数がすでに膨大であったことをものがたっている。

**【貸出冊数】**ここでも望ましい数字4を基準としているが、金井町の平成6年度の3.7は全国平均の2.87（平成5年度）をはるかに凌ぐものである。

**【職員数】**当館で受けた説明によると現在の職員構成は3人の専門（司書）職員と1人のパートタイマーで運営されているということであった。達成率が40%であるということは理想とする職員数は8～10人ということか。非常に高い理想値である。

表1に関するコメントは以上であるが、全体的に気が付いた点を少し紹介しておこう。

《ネットワーク》県立図書館とオンラインで結ばれ、リクエスト・サービスができる。貸出しのときの郵送料は県立図書館が負担し返却時に当館が負担するということがあった。

《広報活動》町勢要覧や広報にも図書館の関連記事があり、図書館自体も案内パンフレットや利用案内のリーフレットをもっている。また月刊で発行される図書館だよりはB4の黄色い用紙に裏表ぎっしりと記事がつまっている。そのNo11の裏には平成7年9月の新着図書が分類されて合計73冊、さらに14冊の郷土資料が紹介されていた。

《文化活動》館内にはお話しコーナーも設けられており、読み聞かせや紙芝居が行なわれている。ほかにも映写会、講演会、各種講座、読書習慣行事など多彩である。ここにあげるのはおかしいかもしれないが、ブックモービルの活躍もあるようである。

《身障者のために》館は一部2階建てであるが、エレベーターが設置されている。トイレやスロープはもちろんである。

《AV、ブラウジングのコーナー》カセット、C・D、ビデオなども楽しめるようになっている。またブラウジングに備えられている新聞、雑誌などの逐次刊行物も思いのほか多いという印象を受けた。

### 《佐渡の歴史》

すばらしいのひとことに尽きるこのような立派な図書館がなぜこの地に誕生したのだろうか。それは歴史が造り上げた高い文化と、それを大切に育んでいこうとする住民の誇りと知的向上心とがあったからであろう。

少しばかり佐渡の歴史に踏み込んでみよう。はるか縄文の時代から人が生活していたことは遺跡から明らかにされている。しかし、日本海の荒波と冬の厳寒にさらされての生活は想像を絶する忍苦を強いられたにちがいない。そのことがやがてこの佐渡を配流の地とすることになり、多くの人々がここで流罪の刑を受けることになるのである。

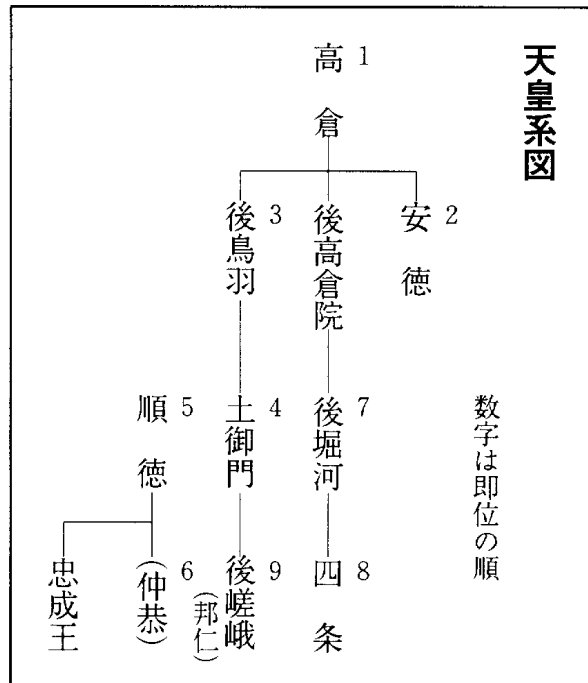
直接この金井で生活を余儀なくされた2人について述べてみよう。



[順徳上皇]

1219年（承久元年）から1221年にかけて、東の鎌倉幕府と西の京都王朝国家の対決は避けられない状態に陥っていった。譲位したとはいえ権力を維持している後鳥羽上皇

はつぎつぎと陰悪な空気を造り上げていく。北条政子の皇子将軍迎立の要求を拒否したこと、2つの荘の地頭を罷免したこと、大内守護源頼茂を自殺に追いやったこと、そしてついに決定的な要因となった北条義時を追討する宣旨を行なったことである。幕府は東国御家人の動員令を発し関東の結束を図った。承久の乱である。美濃・宇治の合戦で破れた上皇方は、幕府軍によって3人の上皇が配流されることになる。後鳥羽上皇が隠岐へ、土御門上皇は土佐へ、そして順徳上皇がこの佐渡へであった。順徳上皇このとき24才であった。崩御までの22年間この地で無念の生活を強いられるのであるが、金井町には黒木御所跡が残されている。配流の身とはいえ金井町には22年間京の都の王朝文化が存在したことになる。地元への文化的影響はいかなるものがあったらう。



治の合戦で破れた上皇方は、幕府軍によって3人の上皇が配流されることになる。後鳥羽上皇が隠岐へ、土御門上皇は土佐へ、そして順徳上皇がこの佐渡へであった。順徳上皇このとき24才であった。崩御までの22年間この地で無念の生活を強いられるのであるが、金井町には黒木御所跡が残されている。配流の身とはいえ金井町には22年間京の都の王朝文化が存在したことになる。地元への文化的影響はいかなるものがあったらう。

[世阿弥]

観世三郎（観阿弥）を父に持つ世阿弥はすでに12・3才頃將軍足利義満の前で父とともに能を演じ、義満は以後観世を最良するようになった。世阿弥はその美貌とともに、本来の能役者としてのみならず、『風姿花伝』『花鏡』『音曲口伝』など多くの伝書を著し、また『高砂』『養老』などこれまた多くの能の作品を産み出し、その天才ぶりを発揮したのである。次の將軍足利義持にも多大の支援を受けることになる。自分の実子がありながら、観世流は養子にした兄四郎の子である三郎元重（音阿弥）に、引き継がれていくことになるのだが、やがて時の將軍足利義教によって佐渡へ配流されることになる。歳はすでに70才を越えていた。この配流の理由であるが、通俗的には世阿弥が義教の命令に背いたからと言われているが、事実はそれに反しているようである。堂本正樹氏によると、義教は將軍就任以前から音阿弥をひいきするのに熱中しており、將軍家専属の猿樂は音阿弥率いる観世座であると決め付けていた。さらに悪いことに、義教は異常性格の持ち主であり、すでに隠居の身でしかない世阿弥を交通事故的に配流の身としてしまった、というのである。まさに歴史は小説よりも奇である。金井町に配されて死ぬまでの10年足らず、世阿弥は200年前の自分と同じ境遇の順徳上皇を偲び毎日涙したと伝えられる。ここには、世阿弥最初の配処万福寺の跡碑や正法寺などがある。

さらにはずっと後の江戸時代、佐渡奉行大久保長安の影響もあり、現在も佐渡では薪能などが毎年行なわれるほど能が人々の暮らしと密着しているのである。

このほか、日蓮、文覚上人、穂積朝臣老、京極為兼、小倉実起などなど宗教家、歌人、学者と当時の思想や政治にかかわって流罪の身になった文化人は数限りない。

そして、人々の島への流入を盛んにしたもうひとつの歴史的事実が徳川幕府の文字どおり御金蔵となった金銀の採掘である。ここでいわゆる罪人の島流しと結びつくわけであるが、『安寿と厨子王』の物語のように、人

買い舟さえ暗躍するほど人手を要したこともまた否めないところである。小さな寒村であった相川の村の人口は4万人にも膨れあがったといわれる。金の採掘に関する技術屋としての唐人や、また日本の各地から集まった大勢の町人大衆をめあてに宣教師も姿を見せたという。『慶長年録』にある次の一節が当時の町の様子をよく表わしている。「佐渡の国に金山繁盛して、京、大阪にも御座なきほどの遊山、見物、遊女等充満す。国々より来る金掘り、町人など、かやうの遊興にふけり、元手を失ひ候てことごとく疲れ、国元へ帰る事なき者数を知れず。」

深網笠を目深にかぶり、哀調と艶っぽささえ感じさせながら踊られる本場の佐渡おけさや相川おけさ、勇壮な鬼太鼓（おんでこ）を夕食後のひととき、ホテルのロビーでたっぷりと観賞することができた。この佐渡おけさは九州のハンヤ節が船乗りたちによって伝えられ、次第に変化し完成されたものだという。そういえば、私の郷里鹿児島で接するハンヤ節は、港の酒盛り唄らしく、テンポがはやく賑やかな動きとリズムをもって唄い踊られる。

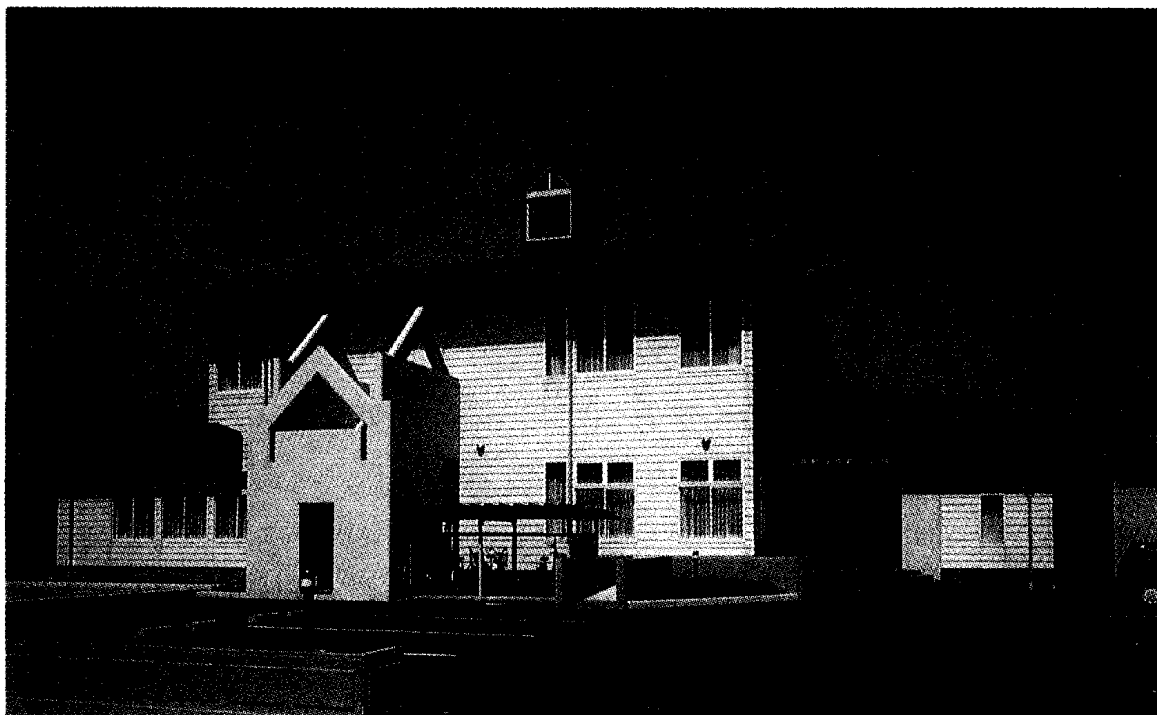
### 《図書館と文化》

地域文化とはごく限られた一部の人だけのものではない。人々のひとりひとりの心の奥底にまで浸透した飾りのない、本物の知的、情操的高まりのことをいうのであろう。いままで述べてきた人間の流入のみにより佐渡の文化が高まったとは言えない。受動的な態度に文化の創造は無い。むしろクリエイティブな心を育てることこそ、文化といえるのではないだろうか。佐渡の文化の発達を田中圭一氏は次のように結論づけている。

「かつて佐渡が金銀産出で栄えたころ、人は島を目がけて集まり、島人は金で他国の完成した文化をとり入れ暮しを整えた。島の文化は一度に高められたが、かなり外面的なものだった。金銀山の荒廃は、他国人の来国を遮断し外来文化の買入れを不能にさせた。島人は船で他国に乗り出し他国の文化をとり入れた。文化は人々の内心にくいこみ、自らの力で文化を

創る力を与えた。佐渡という一つの島の文化が豊富で多様であることの原因の一つに、この国がはげしい繁栄とおとろえの歴史をもつことをあげることができると思う。」

金井町図書館の屋根にはガラス張りの尖塔があり、その中には能の『羽



衣』を舞う世阿弥の等身大の人形が設置されている。時間になるとからくり人形のように回転するしかけもあるそうである。われわれが見学している間にも、事務所の中には外国人女性の訪問客の姿も見られた。見学を終え、外に出るとそこで本を2・3冊小脇にかかえた初老のご婦人とすれ違った。土曜日の午後であった。

このときふと中京大学のL S C (Library Service Center) のことが脳裏をかすめる。1994年10月、中京大学には地下1階地上9階のセンタービルが完成した。その3・4階部分が完全開架式の図書館すなわちL S Cとして、従来の本館図書館と並行して運営されるようになった。それから1年が経った95年10月11日には年間利用者数が35万人にも達した。学生・教職員は無論のこと、中京大学がめざす『開かれた大学』の支柱であるオープン・カレッジの受講者、放送大学の受講者、高校生そ

れに一般市民の利用者もかなりの数にのぼっているのである。

「人が集まるところに文化が育つ」を持論とする梅村清弘理事長・総長の次のような言葉が、L S C利用者の人気を獲得している根源であると考えられるのである。

「大学にはふさわしいロケーションが必要だと思います。また、大学が、近年その必要性が強調されるようになった“生涯学習”の拠点としての役割を果たすためにも、様々な人びとが自然に集まってくる場所に立地するのが望ましいことではないでしょうか。今度、名古屋キャンパスに完成しましたセンタービルも、こうした立地を最大限に生かして、地域文化の中核となるべく、さまざまな面で開かれた大学を目指しています。例えば中京大学へ行けば、お茶も飲める、展覧会もある、オープンカレッジや放送大学もある。図書館も一般に公開されている。あるいはコンサートも催されている。自然に人が集まり、人と人が触れ合う。大学と街、地域が一体になり、新しい文化を生み出す。それが大事なことだと思います」

大学図書館ではあるが、ここでもまた利用者と図書館が相乗作用により高い文化を形成していくであろうことは明白である。

### 《自覚》

UNESCO公共図書館宣言は図書館を教育、文化、および情報のための民主的機関と定義している。日本の図書館状況が西欧諸国にくらべて遅れていることは先に述べたが、文明国と自称する日本政府の威信にかけても大々的な図書館政策を断行して欲しいものである。

もうひとつ、今回私の心にひっかかったことは、— A library is a growing organization—というランガナタンの言葉である。自分自身がその大きな有機体のほんの一部を構成する細胞にほかならないからである。一つの細胞も新陳代謝を繰り返しながら全体としての身体が成長していく。まごまごと悠長に構えている暇はなさそうである。

『初心忘るべからず』はほかならぬ世阿弥の言葉である。一般的に使用

されているこの教訓の意味をいまさら云々するつもりはないが、世阿弥が伝書『花鏡』で書いたこの言葉の真の意味は「初心者未熟を自覚せよ」ということであるらしい。まさに私への餞の言葉そのものである。

( 是 枝 敬 一 )

### 参考資料

新潟県図書館白書 1995		新潟県立図書館
現代図書館学講座 1	渡邊正亥監修	東京書籍
図書館学入門	藤野幸雄・荒岡興太郎	有斐閣双書
われらの図書館	前川恒雄	筑摩書房
図書館のある暮らし	竹内紀吉	未来社
日本の歴史 9	大山喬平	小学館
日本の歴史 13	佐々木銀彌	小学館
江戸時代図誌 13	北陸道二	筑摩書房
演劇人世阿弥	堂本正樹	NHK ブックス
日蓮	田村芳朗	NHK ブックス
真剣味 梅村学園 70年の歩み	和木康光	梅村学園

## 電子図書館への変貌

### 1. はじめに

マルチメディア新時代といわれ、情報形態が多様化する中で、図書館を取りまく社会環境も大きく変化しつつある。

大学図書館の役割は、学術教育・研究を支えることにあるということはいうまでもないことである。しかし高度情報化時代に入ったいま、利用者の図書館への要求も多様化してきている。

1995年10月25日～27日、新潟市において開催された第81回全国図書館大会第3分科会（大学図書館）では、基調講演およびパネルディスカッションを中心に、インターネットとマルチメディアの世界的動向、国内での電子図書館化の動向、各大学での取り組みなどについて報告があり、大学図書館の将来のあり方について検討された。この基調講演、パネルディスカッションに基づいて将来の電子図書館化の方向、課題などを自分なりに考えてみたいと思う。

### 2. 基調講演

まずは「インターネットとマルチメディア」と題して東京大学大型計算機センター教授石田晴久氏による基調講演がなされた。

いまあちこちでインターネットが注目され、流行とさえいえる現象に自分だけ取り残されるのではという危機感をおぼえる人も少なくない。しかし、毎日コンピュータに向かって仕事をしている人、現実にインターネットを利用している人のうち、その仕組みを理解している人がはたしてどのくらいいるであろうか。その点を踏まえた石田氏の講演は、インターネットの基本について初心者にもわかりやすい内容であった。

講演の要旨は以下の通りである。

インターネットは“世界中のコンピュータをつなぐコンピュータ・ネットワーク”である。世界中に散在するコンピュータとケーブルや電話回線

で結ばれ、自由にアクセスできる状態にあることから“ネットワークのネットワーク”といわれる。ひとつのコンピュータから発信された情報——文字だけでなく映像や音声も——は世界中のどのコンピュータにも届くし、世界のどのコンピュータからの情報も受けることができなければならない。それはひとつのホスト・コンピュータを中心に、それぞれ別個のネットワークを形成するパソコン通信とは根本的な違いがあり、個々のコンピュータ同士が直接コミュニケーションできる一環境を提供しているというのが基本である。インターネットでつながっているコンピュータの利用者は自由に知識や情報の交換ができ、共有ができる——つまり誰にも解放された、今までにはなかった規模の新しい人間のコミュニケーション・メディアということになる。

インターネットは1969年のアメリカ国防総省のARPAネット（Advanced Research Project Agency Network）の実験が起源といわれている。この説には異論もあるが、その後のCSネット（Computer Science Network）を経ていまのインターネットになるまで、アメリカでは長距離ネットワーク→短距離のネットワーク（LAN=Local Area Network）→集合としてのネットワークという発展を遂げたのに対し、日本ではLANの研究からはいり逆の経緯を辿ったという違いがある。日本ではLANの研究は1970年後半から進みはじめていたものの、外部とのネットワーク接続の技術は、電話回線を使用することへの法律的な規制があったこと、日本語の使用の問題などで、大きく遅れた。現在ではそれらの問題もクリアでき、それが今日のインターネットの爆発的な普及になっているのであろう。

マルチメディア——複数の異なるメディアの統合的な利用はデジタル・テクノロジーの発展を基盤にしているが、インターネットの普及によって人々はデジタル情報の利用に広がりをもつことになるであろうと思われる。



### 3. パネルディスカッション

基調講演につづいて行われたパネルディスカッションでは、6人のパネラーによる報告があった。各パネラーの所属する大学では電子図書館への変貌を念頭にいくつかの試みがなされているようであるが、まだまだ手探りの状態であるというのが本音であり、そこから生じるさまざまな問題点の指摘もなされた。

たとえば長岡技術大学においては、UNIXサーバをベースにネットワーク対応の図書館システムの構築を進行中であり、WWW (World Wide Web) 機能によるホームページでは図書・雑誌の蔵書検索サービスを公開している。

また新潟国際情報大学では、情報センターというひとつの機関の中に教育研究セクターと図書情報セクターをおき、学内LAN、電子メールを利用した図書の発注依頼・受入報告、電子ニュースによる情報センター案内のほか、インターネットによる図書購入も試みている。

浜松医科大学では電子図書館に向けての人材育成を、専門知識をもつ教員との共同研究と位置づけ、データベース作成の技術開発やインターネットの講習を行っている。また他大学、他部署との相互研修、人事交流も積極的に行っている。

そのほか国際基督教大学、愛媛大学、日本医科大学、の各図書館からの報告があったが、いずれもオンライン・サービスやCD-ROMによる情報の公開を主にしたもので、電子出版などへの取り組みも一部では試みられている。

### 4. 電子図書館に向けての課題

21世紀を目前にして、高度情報化社会がもたらした情報処理技術の発展と情報流通形態の変化は図書館においても電子図書館化という形で現われてきている。図書館が情報発信基地としての色合をますます濃くしていくことはたしかであるし、利用者の要求の多様化にも応えなければならない

であろう。

では電子図書館化とはどういう状況をさすのであろうか。

電子図書館については1995年2月のG7の世界情報基盤構想でも取り上げられ、現在国際共同プロジェクトとして研究が進められている。国内においてもいくつかのプロジェクトが研究を推進し、運用の実用化に向けて実験段階に入っている。しかしその構築内容やイメージは固定したのではなく、著しい情報環境の変化とともに広がりをもつものと思われる。

電子図書館化のイメージとして現時点で考えられることは、

- ① 情報資源の電子化（情報検索）
- ② 情報発信（OPAC等の公開）
- ③ WWWによる図書館利用案内（ホームページ作成）
- ④ 電子メール利用による図書購入依頼、インターネットによる発注
- ⑤ 学内出版物の電子化
- ⑥ 利用形態のネットワーク化

などであろう。

これまで図書館が紙メディアで収集・保存・提供してきた情報資源が、メディアの変化によって映像・画像・音声といった形で電子化して取入れられるようになってきている。これによって利用者はネットワークを介して必要なときに検索し、情報を入手できるようになる。ネットワーク上の電子情報は時間や距離を選ばないし、一度に多人数が利用できる。また自分で保管する必要もない。学内LANの構築がなされれば学内の研究室や各部署からの検索も可能になるし、さらにインターネットへの接続は他大学・他機関のOPAC検索やWWWサーバによる情報検索も可能にする。図書館はこれらの情報を組織化して検索可能にする必要がある。

一方、本学側のOPACの公開も不可欠である。図書館ネットワークが機能するには当然個々の図書館の資料提供がなければならないわけであるが、電子技術の進歩は書誌所蔵情報が図書館の壁を越えて流通することを可能にした。この広がりは無限ともいえるので、効率的で効果的なネット

ワークの組み方を考えていかなければならないであろう。

またWWWによるホームページの作成は、図書館利用案内などに大きな効果をもたらすと思われる。冊子体の図書館利用案内は一冊の冊子としてまとまったものだけに、ともすれば「自分の知りたいことがどこに書いてあるかわからない」「読むのが面倒、聞いた方が早い」と置き忘れられがちである。しかしWWWによる情報探索は指標をたぐっていくだけで自分の見方で求める情報に行き当たることができるので、てっとりばやく情報を得たい利用者には引きやすい手引きとなることであろう。このホームページにOPAC検索を加えて一体化させることも、もちろん可能である。

そのほかに定期的な案内などには電子掲示板（BBS=Britain Board System）の利用が有効であろう。何か展示を行う案内とか、長期休暇期間中の利用案内とか、新刊書の案内などにも利用できるのではないかと思う。ただし、ふつうBBSは誰にも公開されているものであるもので、掲示を見た人の質問等への対処も考えなければならない。案内の内容によってはメーリングリスト利用の電子メールの方がより機能的な場合もあるであろう。

つぎに電子メール利用による図書購入依頼であるが、これは学内LANが構築されれば可能なことであり、その要望も高まるものと思われる。教員各位や各学部の担当者は自分のコンピュータに向かって必要事項を打込むだけだし、データベース検索がいろいろな角度からできるようになれば、検索してそのデータを送るだけというようにもなる。図書館担当者からのアンサー（重複チェックの結果、受入済通知）もメールで行える。

しかしインターネットを利用した発注（主として洋書）となるとそう簡単にはいかないであろう。パネルディスカッションにおいて、新潟国際情報大学からその試みをしているという報告がなされたが、この大学では教員が各自でインターネットを通じてデータベースを検索、そのまま海外の出版者あるいは書店に発注し、その支払は教員各自のクレジットカードでいわば立て替え払をする——という形を取っている。この方法は会計上の

仕組みを根本的に変えるものであるし、その問題がクリアされてもセキュリティの問題が依然として残ることになる。セキュリティについては、技術的にかなり高度なものになっても、100%安全なものとはいえない不安がある。また単科大学のような組織の小さいところでは可能でも、本学のような総合大学では煩雑過ぎはしないかという問題もある。インターネットの利用は、これまで“遅い”“高い”と悪評だった洋書の購入を安定したものにできるので、取次店のインターネット化に期待し、そこでのネットワーク化を考えたほうがより効果的であろう。

学内出版物の電子化は、現在の本学の組織からすると図書館業務の面から少々外れるかもしれないし、出版業務と図書館業務を一体化していくことは非常に困難なことであろう。しかし図書館が今後ますます情報発信基地として機能していくであろうことを考えると、避けて通ることのできない問題である。出版関連部署とのタイアップも考えていかなければならないであろう。

そこでは当然、図書館データの電子出版は第一に考えられることであるが、そのほか大学広報や学報、研究紀要などを電子化し、学内LANなどによる検索を可能にする必要が生じるかもしれない。

さてこのように図書館があらゆる点で電子化され、利用者は図書館に来ることなく自分の欲しい情報を見つけ出すことができるようになると、電子メールを使っただけの貸出依頼という問題にも直面することになると考えられる。おそらく近い将来、文献複写サービスはドキュメント・デリバリー機能によるものになるであろうし、相互貸借もネットワークを通じて行われることになるであろう。では一般の貸出依頼にはどう対応していくべきであろうか。「図書館に来ない図書館利用者」の存在が増えてくると、それに対するサポート体制も必要になってくる。

## 5. 電子図書館化の問題点

前項で、電子図書館とは何かという観点からもいくつかの問題点にふれ

たが、ここでは電子図書館化が実現していく上での問題点（一部重複するかもしれないが）をあげてみたい。

電子図書館化といっても、すべてのサービスがすぐにインターネット上で行われ、マルチメディア対応となるはずはないのである。従来の図書館としてのサービスの維持はいうまでもなく、それをしながら日々変化する新しいメディアへの対応をはからなければならないのが現状である。そこから考えられる問題点としては、

- ① 効率的・効果的なネットワークの構築
- ② 図書館員としての人材育成をどうするか
- ③ 利用者の情報メディア教育をどのようにするか
- ④ 施設・設備の問題

などがあげられよう。

効率的・効果的なネットワークの構築については前項でも少し述べたが、ネットワーク上は情報の洪水であり、とくにインターネットはありとあらゆる情報の収集の可能性を無限のものにしてくれる。しかし、それは反面情報の信憑性や質、価値に対しての問題も生じてくることになるであろう。セキュリティやプライバシー、著作権の問題も含め、情報に対する権威づけなどを考慮に入れたネットワークの組み方は、電子図書館化の重要な課題といえるだろう。

つぎに図書館員の人材育成の問題をあげた。近年どの大学でも他部署との人事交流が盛んで、図書館員としての専門性や経験が活かされないとの声を聞く。たしかに図書資料の収集・整理・保存・提供に関して、司書としての専門性を否定するものではない。しかし従来の司書としての図書館員があまりにも専門性を持ちすぎるがゆえに、一般の利用者にとっては不必要ともいえるデータを与えられ、取っ付きにくい印象を与えていたことも事実である。電子図書館化は従来の「図書館学」的知識を有する図書館員に加え、利用者サイドに立ってマルチメディアに対応できる、新しい形の専門性を有した図書館員を必要とすることになるであろう。

図書館サービスの向上は図書館員の資質の向上にあるといえる。情報の流れが急激な現代においては、いま獲得した知識や技術が、あしたにはもう使えないということもありうる。常に目の前のことに疑問を持ち、新しい知識・技術の獲得に意欲を燃やす姿勢が大切であろうし、そのための研修も重要視される。コンピュータ・リテラシー（コンピュータを使う力、ネットワークに参加する基本的な作法）や情報に関する知識の獲得のための講習会、研修会が多く望まれるところである。

利用者教育に関しても図書館員の人材育成と共通する部分がある。現在行われている図書館ガイダンスは、電子図書館化されることによって文献利用教育が重要な部分を占めるようになっていくと思われる。多様な情報媒体を使こなし、必要な情報を収集し、整理するための情報リテラシー獲得の教育を利用者に行うには、図書館員も情報検索が大学教育で占める重要性を認識し、その上での指導にあたらなければならない。図書館員—教員—利用者が一体となった利用者教育がはかられることが必要であろう。

最後にあげた施設・設備の問題は、図書館が電子化されるにあたり重要な要素ではあるが、図書館のみの問題ではない部分があまりに大きいのでここでは取り上げない。ただ設備の充実には、利用者の声が十分に反映されるよう努力すべきであることはいうまでもない。

## 6. おわりに

図書館、とくに大学図書館の機能役割とは何か。電子図書館化を云々する前にこういった問題もあらためて考えられなければならない。利用者の多くが図書館は本のレンタル施設と考え、AV視聴場所、なかにはコピー機設置場所としての認識しかもたない状況にあって、図書館が情報発信基地として位置づけられるにはより努力が必要であろう。

一冊の本を借り出し、それをじっくり読むという姿勢も必要であろう。しかし大学図書館にあっては当然研究ということが前提になるので、利用者が本というものを、「本は読むもの」という意識から前進して「本で調

べる」 — ものごとを追求していくためのツールと考えるようになれば、図書館の利用の仕方は自ずから変わってくるはずである。こうした利用の仕方は、書物の役割に対する認識を根本から覆すことであり、多くの利用者には未知の部分であろう。ひとつの事実を浮き彫りにしていくために多くの情報の中から断片的に知識を取り出していくという作業は、電子化された図書館においてより容易になることであり、利用者教育を徹底させることは積極的な図書館利用者を生み出すことになろうと思われる。その教育を通じて図書館の情報資源の発信・受信の基地としての役割を明確にさせることが可能になるといえる。

インターネットとかマルチメディアとか、情報社会の急激な流れは、現実問題として時代においていかれるという強迫観念を多くの人に感じさせている。図書館が電子化され、機能的にすぐれたものになることは、反面その便利な機能を使いこなせない利用者の、図書館からの足を遠ざけるといふ現象を生むことになる。従来からのサービスを怠ることなく、誰もが、どんなときにも使える電子図書館を構築していくことが、情報化の波の中にある図書館の最大の課題であろう。

( 伊 藤 覚 子 )